

---

# カクレンボ地獄

古都

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カクレンボ地獄

### 【Nコード】

N5165M

### 【作者名】

古都

### 【あらすじ】

負けると鬼の生贄に、勝つてももう1戦。鬼が勝つまで終わらない。

そんなカクレンボ地獄で、そのモノがカクレンボを行う。そのモノが隠れて1時間半。

もうすぐ終了という頃、後ろで物音が聞こえる。そこから迎える結末とは。

## （前書き）

人生で初めて小説を書いてみました。読むのと書くのと違いであることが大変良く解りました。そもそもこれが小説と言って良いものかどうか疑問ですが、一つよろしくお願い致します。

カクレンボが行われている。

時間は2時間。

鬼はそれまでに隠れているモノを発見できれば勝ちとなり、隠れているモノは鬼に発見されなければ勝ちとなる。

鬼が勝った場合、隠れているモノは鬼への生贄として自らを差し出さねばならない。ここで言う生贄とはつまり、鬼の食糧になることである。そのため、隠れているモノは自らの命を守るため最大限の集中力、知恵を絞って隠れ通す、あるいは逃げ切ろうとするのである。

逆に鬼が負けた場合どうなるのか。鬼もまた命を差し出すようなことになるのだろうか。

いや、そうではない。そうではなく、もう1戦始まるだけである。そのまま、鬼が勝つまで永遠と何戦でも繰り返される。ここはそういう場所、カクレンボ地獄なのだ。

さて、今行われているカクレンボの残り時間が30分を切ったようだ。

どんな様子でカクレンボが行われているのか、少し覗いてみようではないか。

「一体なんやねんな……。」

そのモノは脱力気味に、誰かに問うように、呟いた。1人きりであるそのモノに、当然、答えるものはいない。呟きは、虚しく、響きすらせずに、空気に溶けていった。

そのモノがそこに隠れ始めて、もう一刻半ほどたつ。そのモノは少し立ち上がり、目だけを器用に動かして辺りを見回した。

瞳に映るのは、どんよりと曇った灰色の空に、拳ほどの大きさの石

が積まれて形成された灰色の石山が、ぽつり、ぽつりとあるばかりであった。石山は1メートルほどの高さまで積まれており、しゃがめば丁度身体を全て隠すことができる。そのモノは、石山と石山の間に縮こまって身を潜ませていた。

「一体なんやねん……。」

そのモノは再び同じ言葉を呟いた。もしかすると、この一刻半の間にも何度も呟いていたのかもしれない。

「誰も来うへんやんけ……。隠れるばかりつてのもつまらんもんやな……。」

そう言いつとそのモノは目を閉じ、何かを考える様子で静かに喋り始めた。

「カクレンボで隠れる側が絶対勝つには、鬼に見つからんかったらええ。ほな、絶対鬼に見つからんようにするにはどうしたらええか」そのモノは続ける。

「一つは、完璧に隠れることやろな。鬼が探しても絶対見つからんところに隠れたらええ。でも、そんなところあるんかといえば、ないよな。」

「隠れる側が見つけた隠れ場所って言うのは、隠れる側に一回見つかったって場所や。そんな場所を、探す側が絶対見つけれへんということはない。無論、見つけれへん場合もあるやろうけど、それはたまたまであって、絶対やない。」

そのモノは熱が入った様子で、だんだんと大声になってゆく。

「じゃあ他にはどうしたらええか。例えば、鬼が一回探した後にある場所に隠れるとどうや。鬼が同じ場所を探しにくるか？いや、出来るだけ新しい場所を、探してない場所を探す筈や。時間無制限であれば、くまなく探せるものの、今回は2時間しかあらへん。戻って探す暇なんて無い筈や。つまり……。」

そこまで言ったその時、

ジャリッ。

そのモノの後の方、少し離れたところから、石を踏みならしたような音が聞こえた。

そのモノは一気に無言になり、落ち着きなくソワソワし始めた。

ジャリッ、ジャリッ。

石を踏みならしたようなその音がそのモノに近づいてくる。

そのモノは息を殺し、ゆっくりと、音を立てないように後ろを振り向く。目の前には石の山が立ちはだかる。そのモノが相手を確認することはできないが、相手もまた、そのモノを確認することはできない。

ジャリッ、ジャリッ。

そうしている間にも、音はそのモノに迫る。

「こっちに来るんか……？」

そのモノは恐怖にでも包まれたかのような今にも消えそうな声で呟いた。

音なんて通しそうにないくらい、辺りの空気が張り詰めてゆく。しかし、

ジャリッ。

音は止まらない。今の音を含めて、あと3回、音が聞こえるとそのモノと音の持ち主は相対することになるだろう。

ジャリッ。

そのモノもそれを分かっているのか、今の音で身体の態勢をすぐに

行動できるように整えた。  
あと1回。

……。

……。

……ジャリッ。

世にも恐ろしい声が響いた。

「見つけたぞお！俺の食糧！！」

そのモノは、毛深い腕で、やってきた音の主を捉えた。

やってきた音の主は、鬼が探し終わった場所にやってきた、このカクレンボの隠れるモノだったのであった。

そしてそのモノは、単に探すことに飽き、趣向を変えてカクレンボに臨んだ、鬼だったのである。

さて、如何だっただろうか。

今回は鬼の勝ちとなったが、勿論隠れるモノが勝つこともある。

実は今回も、カクレンボの終了時刻まであと1分、紙一重だったのだ。

とはいえ、隠れるモノが勝っても鬼が勝つまで繰り返されるだけなのだが。

ここはそうゆう場所、カクレンボ地獄なのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5165m/>

---

カクレンボ地獄

2010年11月3日01時17分発行